

ロロメータの冒険者たち

おいがつお

I

春先ではつくしが取れる。最近、遠出をするときの道中の食事には、ぼくが事前につんできたつくしの料理が加わるようになった。

現在、ぼくたちは草っぱらに円を描く^{えが}ようにして座り、お昼ご飯を食べている最中である。

「わたし、ラークに会うまでつくしを食べることなかったけど、なかなかおいしいわね」

そう言つてマレアは今日のお昼のおかず、つくしの卵と同じにフォークを刺した。

この卵と同じは、朝、ぼくがお弁当用に作ったものだ。うれしいことにパーティのみんなには、けっこうウケがいい。

「アタシは昔、食べたことがあったな、つくし」

マレアの反対側に座つて、パンをかじっているのはミケーレである。

「つくしは食えるつて聞いたことがあったんだ」

「あ、それはわたしも前に聞いたことある。最近になつて、食べたのが初めてつてだけで」

マレアが手を止めてミケーレに言った。

「そうだったのか。それでな、あの時のつくしは苦くて食べたものじゃなかったぞ」

まだパンをふくんだままの口で、いっしよに卵と同じもほおばつたミケーレ。

彼女はむしやむしやと数回口を動かし、中のものを飲みこんだ。

「でも、この卵と同じはうまいや。なあラーク、つくしには苦いやつとそうじゃないやつがあるのか？」

「下処理の仕方だね」

ぼくはミケーレの質問に答える。

「やり方によつては苦味が残るよ」

「そうなのか」

会話を耳をかたむけながら卵と同じをつついていてフェレオルとはちがつて、ぼくは苦いのが少し苦手だ。マレアとミケーレにいたつては、苦いのがすごく苦手だ。

パーティメンバーの四人中三人も苦いのが好きじゃないので、ぼくはつくしの下処理をするとき、けっこうしつかり苦味を取っている。

「つくしの下処理つて、めんどろで時間もかかるんだよね。調理のときよりも、下準備の方によつほど時間を使わなきゃいけないくらいに」

「なにっ！」

ミケーレは目を見開く。

「硬い部分をしっかりと取り除いて、アク抜きもしないと味もマズいしね」

「下処理をしないとおいしくないのか？」

「まあ、まともに処理してないつくしは、ぼくも食べたくないかな」

「そうか……」

イヤなものを思い出すかのようなミケレの表情。

「……もしかして、ミケ、生えてたつくしをそのまま食べたの？」

「……うむ」

小さく返事をする彼女を見て、あっはっはとマレアが笑った。

なんだかピクニックにでも出かけているような始まり方になってしまった。

言っておくと、ぼくたちは何もわざわざつくしを食べるに町の外に出ているわけじゃない。

こんな草原でお昼ご飯をとっているのは、ぼくらが冒険者であり（と言っても駆け出しを卒業できたくらいの実力だけだね）、依頼を受けた村に向かっている途中だからである。

冒険者というのは、ざっくりとした物言いをする、

何でも屋だ。行商人の護衛をしてくれとか、畑を荒らす

モンスターを退治してくれとか、そういう依頼を受けて、

収入をもらって生活している。

依頼を見つけるのに一番いい場所が、様々な依頼の集まる冒険者の店だ。

今回受けた依頼も、ぼくらが拠点にしている田舎町口

ロメータにある唯一の冒険者の店（はるかぜ亭）の依頼

掲示板で見つけたものであった。

「これか。さっきフェレオルの言っていた、新しく出た依頼って」

ぼくは掲示板に貼られた、一枚の依頼書に目を止めていた。

『動物が凶暴化した原因を突き止めてください』

という見出しの依頼である。

「ええ。どうですかね、受けてみるのは」

ぼくのとりにいるのは、パーティメンバーの一人で、この依頼を見つけてきたフェレオルだ。

パーティ最年長（でも実年齢より若く見える）の彼は、

すぐれた盗賊である。

盗賊って言っても泥棒どろぼうとかそういうのじゃなくて、冒険者としての職業、クラスのこと。

具体的に言うと、遺跡に残った危ない罫を見つけたり、宝箱のカギを開けたり、スイスイと壁を登ったり、そんな器用な技術をフェレオルは持っている。

「報酬も悪くないし、いいんじゃない？」

フェレオルの意見に真っ先に賛成したのはマレア。

ウイザード魔法使いの彼女は、シェイプアイという種族である。

見た目はほとんど人間と変わらないが、瞳ひとみに特別な力を宿した種族だ。

赤とか、青とか、ハデな瞳と髪の色をした者が多いシェイプアイだが、それと比べるとマレアのは地味な色合いである。だけど、彼女の栗色の瞳はとてもきれいでぼくは好きだ。

「アタシもかまわないぞ」

マレアの頭の上から依頼書をのぞきこんでいる、背の高いミケールはドラゴニアンだ。

竜の力を持つ種族、ドラゴニアンは、外見の個体差が激しい。直立した翼のないドラゴンという姿だったり、はたまた角としっぽと、それから手足に爪とウロコを残す以外は、人間に近い姿だった。

オレンジ色のウロコをした、ミケとニックネームで呼ばれる彼女の外見は後者の方。

戦闘では大力だいきを活かしてデカイ斧おのを振り回す、パーテ

イの戦士だ。

「ラークはどうでしょう？」

フェレオルがぼくの方を向いて言った。

パーテイの四人目が、ぼくことラーク。種族はフェレオルと同じ人間である。

クラスはレンジャー。盗賊とは少し別の方向に器用なクラスだ。

戦士とか魔法使いとかと異なり、レンジャーというのは、ぼく自身も説明が難しいクラスなのだが……うん、野外活動の専門家といったところなのだろうか？

まあ深くは考えずに、こういうクラスもあるんだよ、くらいに思ってもらえれば。

ともかく依頼に関しては、ぼくもマレアとミケの二人と同意見であった。

「うん、賛成」

ぼくはうなずいてフェレオルに返事をする。

「それじゃあ、エイプリルのところに行きましようか」
エイプリルは、〈はるかぜ亭〉の看板娘のワーキヤットだ。

獣人——ライカンスロープの一種であるワーキヤットも、外見の個体差が激しい（そもそもライカンスロープ全体が、それぞれで全然ちがう見た目をしている）。

耳としっぽだけに動物の特徴を残す者もいる中、身長こそマレアと同じくらいのエイプリルの顔は、ほとんどネコのそれである。

ある意味、看板娘と看板ネコを両立している人なのかもしれない。

依頼書を引き抜いたぼくたちは、エイプリルのいる受付へ向かった。

「エイプリルっ」

仲良しのマレアの声を聞いて、何か書類を書いていたエイプリルが顔を上げる。

「あつ、マレア。それにみなさんも」

エイプリルのにこやかな笑顔。

「みなさんおそろいということは、何か依頼の話ですか？」

ぼくは先ほどの依頼書をエイプリルに差し出した。

「うん、これについてくわしく聞かせてほしいんだ」

「はいはい、少々お待ちくださいね」

依頼書を受け取り、エイプリルは背を向けて後ろの棚に手を伸ばした。

「えーっと……あつた、これだ」

ちよつと待っていると、何枚かの資料を手を持ったエ

イプリルが戻ってくる。

「お待たせしました。カムオ村からの依頼ですね」

資料に目を通すエイプリル。

「依頼者はカムオ村の村長さん、村の東にある森で異変が起きたそうです」

「カムオ村ですか。ロロメータから、徒歩で半日以上はある村ですね」

「ですす」

フェレオルの言葉に、エイプリルはうなずく。

「それでですね。三週間くらい前から、東の森の一部に

霧きりが立ちこめ始めたんだそうです。最初は変だなあ、くらいにしか思っていなかったらしいのですが……」

エイプリルが二枚目の資料に視線を移した。

「霧の中に生息していた動物が、凶暴になってしまったという報告ができました。さしたるケガはありませんが、

すでに村の猟師りょうしが襲われています」

「ありやりや。でも軽傷だったのね」

よかった、とマレアは息をほく。

「これ以上被害が出るまえに異変の原因を突き止め、解決してほしい、とのことです」

かくして、ぼくたちはカムオ村へ行くことになった。今から出かけたなら途中で野宿をする羽目になるので、明

日を待つて出発することにする。

そして次の日の朝、つまり今日ロロメータをたつたというわけだ。

お昼ご飯の休憩を終えたぼくたちは、さらに三時間くらい歩き続ける。

「おっ、アレだな、カムオ村は」

村を指さすミケ。夕方ごろ、ほぼ予定通りの時刻に、カムオ村に到着だ。

そこまで大きくないロロメータの町と比べても、ずいぶん規模は小さい。けれど、あちこちで見かける畑はどれもよく手入れされた村だ。

村で最初に会った男性に、ロロメータから来た冒険者だと名乗ると、すぐに村長の家へと案内してくれた。

「さっそくですが、本題に入らせていただいてもよろしいでしょうか」

村長の家におじゃまし、軽く自己紹介をすませたぼくらは、うながされるままにイスに座った。

ぼくらをここまで連れてきてくれた男性、ナラトさんも、村長のとなりのイスにつく。

「ええ。東の森がおかしなことになっていると聞きました。が」

「そうなのです。森の生き物が凶暴になってしまつて……」

ぼくの言葉にそう返す村長に、フェレオルが次いで質問をする。

「霧が出たとも、うかがいました。そちらについてはどの程度ご存じですか？」

「それは俺が話します」

村長のとなりでだまつていたナラトさんが手を挙げた。「俺が最初に、森に霧が出たのに気づいたんです。ふだん、猟師として森にはよく出向くので」

ナラトさん、村の猟師だったのか。動物に襲われたという猟師からはどのみち話を聞こうと思つていたから、家まで訪ねる手間が省けた。

「霧が発生したのは森の奥地、俺たちが猟をする地帯の一面ですね」

「東の森に霧が出たことは、以前にもありましたか？」

「一回だけ。俺がまだ子供のころの話ですが。あん時あ、俺もまだ見習いでした」

前例はあったんだ。でも、今回ぼくたちに依頼をしたということは、以前とはちがう何かが起こつたんだろう。

「だから、めずらしいとは思いましたが、怪しいとまでは思いませんでした。霧の中に入らないようにはしました。が」

ナラトさんが組んでいた腕をほどいた。「……今からだと、一週間く……」

らい前の話だったかな。霧の発生した近くまで狩りに出かけたとき、チューベルが泡を吹きながら俺に襲いかかってきたんです」

腹の減ったオオカミならともかく、小型のネズミモンスターであるチューベルは、自分から人間に襲いかかるようなマネはしない。

それでも一回限りなら、たまたま興奮状態のチューベルに出会っただけだったのかもしれない。しかし次の日、不審に感じたナラトさんが霧の中にまで足を運んでみたら、今度は二匹のアナグマが、目を血走らせてけんかをしている光景を目撃したらしい。

アナグマにしては度が過ぎるほどのけんかを見て、いよいよこれは何かおかしいぞと感じたナラトさんは、冒険者へ依頼を出すことを村長に提案したそうだ。

「凶暴になった動物が大勢いる森で、狩りなんてしたくはないでしょうから。そこを仕事場に行っている、猟師たちが大ケガをするまえになんとかしてほしい……というわけです」

「なあるほど。それにしても、ヤバいと思った霧の中に行こうだなんて、ナラトさん度胸あるわね」

マレアが感心している。

「いちおう、歩きなれた場所ではあったので。さすがに深く潜るつもりはなかったし、危険を感じたらすぐ引き

返すつもりでしたよ」

ナラトさんが話し終わった後、村長がぼくらに頭を下げた。

「みなさま、お願いします。どうか事件を解決してください」

ほかの冒険者たちはどうかかわからないが、真正面からこうやって依頼者からお願いをされると、その、むずがゆく感じてしまう。

もっと経験を積みれば、だんだんこの感覚にも慣れてくるのだろうか。そうなるのはいつの話かなあ。

II

東の森へと出向くのは明日に回すことにした。

村長の家を出てみれば、もう日が沈んでいる。今から森に行ったとして、視界の悪い霧の中、さらに夜になつてしまった森を歩くなんてことはごめんだ。

ぼくらは村長に場所を教えてもらった、村に一つだけある宿屋におじゃました。今日泊まる部屋に荷物を置き、

一階に下りる。

ぼくら以外に宿泊客はいなかったが、一階の酒場には、仕事終わららしき人たちがそここに集まっていた。

いちおう、霧について知っている人がいないか酒場で尋ねてみたけれど、実際に現場に行った人はナラトさんくらいだったみたいだ。彼より情報を持っている村人はいなかった。

「よし、それじゃあ明日に備えて飯だ！」

あんまり収穫しゆかくのなかった情報収集が終わると、もうすっかり夕飯時だ。酒場で聞きこみをしていたときから、時々お腹をひかえめに鳴らしていたミケに反対する者など、いやしない。

人も増えてきた酒場のテーブルの一つに、ぼくたちは座った。

マレアはメニューの書かれた羊皮紙をながめる。

「さーて、メニューは何があるかしら」

「それなんだが、カラアゲダングの塩ゆでがうまいって聞いたぞ」

霧の話ついでに、ミケはちゃっかり酒場のオススメについても聞いてきたらしい。

カラアゲダングとは、二回りほど大きいダングムシに

似た生き物だ。ごつごつした殻が、キツネ色に揚げられてしまったような形と色合いをしているので、そう名づけられたらしい（丸まってしまおうと単なる鳥のからあげにしか見えなかったりする）。

「カラアゲダングって、虫……だよな？ 食べられるの？」

「あれ、マレア知らなかった？」

カラアゲダングは、この辺りの田舎では食用虫の一つとして数えられており、その名の通り、揚げて食べられることが多いのだ（こうなると虫っぽさがほとんどなくなり、ますます単なる鳥のからあげにしか見えなくなる）。

「虫自体食べたことないわ。……虫ねえ、いけるかしら？」

「カラアゲダングはわりと食べやすい方だと思うよ。塩ゆでなんて食べ方は、ぼくも初めてだけど」

「そうなのね。まあ、オススメされたのなら、せっかくだし食べてみようかな」

そう言って、彼女はカラアゲダングの塩ゆでを一皿注文した。

「みんなで分けましょ」

とマレア。

しばらくして、ホカホカに湯気の立ったお皿が一つ、ぼくたちのテーブルに到着。

「うわー、けっこう虫って感じなんだ」

やってきた塩ゆでを、マレアはもの珍しげに見つめる。衣をつけていない素の状態の塩ゆでは、さすがに「らしさ」が残っているが、多分都会の人でも抵抗はそこまです感しない見た目だ。

ためらいを一切見せず、いの一歩にミケは塩ゆでに手をつけた。ぼくも、小さいころに虫料理はそこそこ食べてきたので、そんなに気味悪くは感じない。

ぼくが塩ゆでを取るのを待っていたフェレオルも手を伸ばし、最後に若干おっかなびっくりな様子でマレアも続く。

「うまい！」

ミケの言う通り、たしかにおいしい。かんだ瞬間、塩ゆでのくせして、ジャクツ、と揚げ物のような音を立てる。このカラアゲダング本来の、サクサクした食感が損なわれていないのはすごい。

塩加減もいいし、これはいいものを頼んだ。

ミケ、グッジョブである。

腹ペコのミケは早くも二つ目に食いつき、フェレオルも満足げな表情を浮かべている。

「……………」

ぼくらの様子を見て、ちよつとひるんでいたマレアが小さく塩ゆでにかぶりついた。

「んっ！」

マレアが口を閉じたまま声を上げる。

「おいしいじゃない！」

次の塩ゆでには、まったくひるむことなくパクつくマレアであった。

みょうちよう

明朝、霧の発生場所までは、ナラトさんが案内人としてついてきてくれることになった。

「俺でも一人で歩けるくらいだから、そんなに危険な生き物はいませんよ。……少なくとも、霧が出るまえは」

「うげえ。不吉なこと言わないでよ」

マレアがちよつとだけまゆをひそめる。

「とは言っても、危険な何かが霧を発生させている可能性は十分にありますからね」

「もー、フェレオルまでそんなこと言う」

マレアはますますまゆをひそめる。まあ、本人も危険がありそうなことをわかって言っているのだろう。

「それに、俺も寄りつかない奥地には、どんなモンスターがいるかわかりません」

そんな話をしながら歩いていると、霧のかかったエリアへとやってきた。

「あれ、おかしいな……」

ナラトさんが首をかしげる。

「どうしたんですか？」

「いや、一週間前は、こんなところまで霧はなかったはずなんです……」

ナラトさんが周囲を見回した。

「霧の範囲が広がったのか？」

「そうかもしれません」

だれに聞くでもなかったようなミケの疑問に、フェレオルが同意した。

あんまり時間をかけすぎるとマズいかもしれない。

「ナラトさん、ここまでありがとうございます。後はぼくらに任せてください」

「よろしくお願いします」

ナラトさんはぼくたちに一礼して、来た道に戻っていった。

「ここからが本番ですね」

「おう！」

「カラアゲダングゴのためにも、がんばらないとね！」

カラアゲダングゴは森で暮らす虫だ。宿のカラアゲダングも、村の猟師たちが東の森から採取しているヤツなのかもね、とぼくが言ったことが、女性陣のやる気につながったらしい。

「帰ったら塩ゆでとエールで乾杯だ」

ことに、ミケは昨日の塩ゆでがお気に召したようだ(まあ、彼女は大体のものを何でもおいしくいただくタイプであるが)。

気持ち新たに、ぼくたちは霧の立ちこめる森へと踏みこんだ。

覚悟していたよりも視界はある。このくらい視界が開

けているなら、霧というより霞かすみだろう。

それでも光源がほしいことには変わりない。

ぼくは腰に差していた、一本の太い棒ぼうき切れを抜いた。

「マレア、これに《ライト》をお願いします」

「オッケー」

マレアは何かを唱え、ぼくの右手の棒切れを指さす。

すると、棒の先端が青白く光り始めた。

マレアが使ったのは魔法の一つ、《ライト》だ。指さした場所を起点にして、周囲を明るく照らすことができる魔法である。物体にかければ、こうやって光源を持ち運ぶような使い方も可能だ。

《ライト》なんて初歩的なウィザード魔法だとマレアは言っているが、それでも十分便利である。

「ありがとう」

マレアにお礼を言って、ぼくは《ライト》のかかった

棒切れを、松明たいまつのようにかかげた。

さあ、探索開始だ。

III

森林での活動に長けたレンジャーであるぼくは、パー

ティの仲間たちを先導せんどうしていた。

村の猟師たちが狩場かりばにしているだけあって、この森は
ずいぶん歩きやすい。霧がなかったら、歩き回るのに全
然苦勞くろうしなかっただろう。

「どう、ラーク？ 何かあやしい感じとか、する？」

「うーん……さっぱり」

横に並んだマレアに、ぼくは答える。

ほとんどゼロの状態から、霧の発生源にたどり着こう
というのは、やっぱりしんどい。霧がより深く出ている
と感かんじる方へと進んではみているものの、今のところ手

ごたえを感じられない。こういうのが、もつともつらい。

「お……」

と、ぼくは立ち止まった。そして、棒切れで地面を照
らす。

「何かあったの？」

マレアが光の先へ顔を向けた。

「足跡だ。ウサギのだね」

「先ほどもありましたね、足跡。あれはキツネのもので
したが」

「うん、そうだね……」

ぼくは片足でしゃがんで足跡を見つめた。

「不審な様相でもありましたか？」

後ろで見守っていたフェレオルに、ぼくは振り返る。

「残った足跡から考えるに、歩き方が乱れているんだよ

ね。酔っぱらって千鳥足ちどりあしで歩いた感じと言うか」

「ウサギがお酒飲んだの？」

「まさか」

「きつとラークよりもお酒に弱いね」

「さすがにウサギと比べられるのは……」

ぼくとマレアが冗談じょうだんを交わしていた、その時だ。

「みなさん、前方から何か来ています」

フェレオルの言葉に、ぼくはあわてて立ち上がった。

「……数体の影があるな」
斧を持ち直したミケがつぶやく。

霧のせいによく見えないが、どうやら何かの群れのようだ。けっこうな早足らしく、それはどんどん近づいてくる。

まもなく、正体がわかる距離まで影の正体が近づいてきた。

体高は、ぼくのヒザの関節より小さいくらい。ネズミにしてはなかなかの大きさだ。

また、青みがかった灰色の毛皮をした頭部から、硬そうなこぶが飛び出ている。

そんなモンスターが六匹。

「出たな、チューベルか！」

「いや、ただのチューベルじゃない。ナットチューベルだ」

「チューベルとどうちがうんだ？」

頭のコぶが特徴的なナットチューベルは、チューベル系統のモンスターの一種である。

多種多様なチューベル種の中でもそこまで怖くはない部類であり、戦いの際には、硬いこぶによる頭突きに気をつければ問題ない。そもそも、ナットチューベルもふつうのチューベル同様、自分から戦う性格ではない。

しかし、ぼくたちの目の前にいるヤツらは、どうもそうではなさそうだ。

ナットチューベルたちの目は充血し、口の端からよだれが垂れている。

明らかな錯乱状態である。

「ねえ……なんか様子が」

「ああ」

みんなもチューベルたちの異常に気づいたみたいだ。

これはもう、まちがいに戦いになるだろう。

ぼくらは戦闘態勢を取った。

東の森での、初戦闘だ。

ぼくらの警戒に答えるように、カツと目を見開いたナットチューベルが飛びかかってきた！

「来い！」

こちらの先陣を切ったのは、戦士ミケ。腰を落とし、飛びかかるチューベルに向かって、両手でかまえたバトルアックスを一閃。

さすが、ドラゴニアンたるミケが振るった斧の威力はすさまじい。一気に二体のナットチューベルを吹き飛ばした。

「あたりが弱かったか！」

そう言ったミケだが、両方のチューベルをほとんど瀕死の状態までもっていった。だが、彼らが逃げ出す気配はまったくくない。

それどころか、我を忘れたかのような様子で、ミケに向かつて頭突きのかまえをとる。

それならば仕方がない。ぼくはブロードソードを抜き放ち、再びミケに襲いかかろうとするナットチューベルに斬りかかった。

ミケに気を取られていたチューベルたちは、ぼくのことが眼中になかったらしい。

二体のナットチューベルは、よける間もなくぼくの剣をまともに喰らった。

あとは四体だ。

二体の同胞にとどめを刺したぼくへと、横から別のナットチューベルがかみついてきた。が、これは危なげなく身をかわず。

さらにもう一匹がぼくの近くまで接敵してくるが、こちらはミケが受け止めた。

ガチツ、とナットチューベルの歯が斧の柄えに突き立てられた音。ナットチューベルは口を離して着地。

反撃とばかりに、ミケが斧を振り下ろした。かろうじてよけたナットチューベルだが、そこへしかけたのはマレアだ。

彼女は細身の短い、愛用の木製ワンドの先端をチューベルにかざす。《マジックアロー》の魔法を唱えたマレアは、魔法で作られた光の矢を発射した。

矢はナットチューベルに突き刺さった。動きの止まったところにミケの一撃が叩きこまれ、チューベルは真つ二つになる。

「ラーク、そつちは！」

「大丈夫！」

ナットチューベル一匹なら、ぼく一人でも十分勝てる相手だ。ミケに負けじと、ぼくは相手をしていたナットチューベルに剣を撃ちこんだ。

そのころフレオルは、残りの二体のナットチューベルと向かい合っていた。相手の頭突きを彼は軽々とよけ、ショートソードで斬り返す。

彼が剣を納めたとき、二体のナットチューベルは腹を見せて戦闘不能になっていた。

「これで全部ですわね」

「ああ」

ミケは倒れたナットチューベルたちを見下ろす。

「しっかし本当に出たな、凶暴になった生き物」

倒れているのは、おとなしいナットチューベルの性質とはかけ離れた、いや、何かの理由でかけ離れてしまったのかもしれないチューベルたちだった。

「ナラトさん、霧の中を見てきたとか言ってたけど、みんなの出会いわなくてよかったわね」

「まったくです」

駆け出し冒険者のぼくたちでも楽に戦えるモンスター

とはいえ、一般の猟師がナットチューベルに集団で襲われたら、対処は少々きびしい。相手が凶暴になっているならなおさらだ。

「これは、しつかり原因を突き止めないとね」

「じゃないと、宿からカラアゲダングのメニューが消えちゃうからな」

まだ言ってる。

「ナットチューベルは、森の奥から来ていましたね。足跡をたどってみましょうか」

「手がかりがあるかもだかね」

フェレオルがぼくに顔を向けた。

「ラーク、足跡を追えますか？」

「任せて」

ブロードソードから《ライト》の棒切れに持ち替えたぼくは、探索を再開。

が、追いかけていたナットチューベルの足跡は、すぐに途切れてしまった。

これで搜索はふりだした。また新しい手がかりを求めて、さらにぼくたちは奥地へ進む。

今のところ、ナットチューベルたちと戦って以降、戦闘は起こっていない。イタチやアナグマなんかの姿を何度か遠目で確認はしたが、気づかれないうちにさっさと退散してきた（凶暴化している可能性が高い相手と、わざわざ会う必要なんてないからね）。

だが、探索の最中には、思わず立ち止まってみたくなるようなものにも出くわした。

「何あれ？」

声を上げたのは、マレアだった。

森をさまようぼくたちの前に、どでんと出現したのは、十数の風変わりな、大きなキノコ。

なかでも大きいヤツは、百八十センチ近いフェレオル

やミケよりも背丈のあるキノコだ。キノコの柄は、マレアがぐるっと腕を回せるくらいには太い。

幅の広いカサの部分は暗い赤一色、と思いきや、近づいてカサの下をのぞくとそこは青色。

そんなキノコが、周りの木々に負けず劣らずのいきおいで、地面からしっかりと生えていた。

「なんなんだ、こりゃ」

ミケが不思議そうにキノコを見上げる。

「モンスター……ではなさそうですね」

フェレオルもキノコを見上げる。

「ラークはこのキノコのこと知ってる？」

「多分だけど、赤雨大キノコ、かな？」

カサの上部は赤色、下部は青色。そしてこの大きさ。

父さんからもらった森の生物図鑑に載っている、赤雨大キノコの特徴だ。

「実物は初めて見たけど、まちがいないと思う」

「へえー。趣味の悪い色したキノコね」

マレアがワンドの先つちよで、キノコのカサをつんつん。

「いちおう、カサは料理に使われることもあるみたいだよ」

「ということは、食べられるのか」

ミケのキノコを見る目が変わった。

「うまいのか？」

「どうだろう。色合的には、シチューとかの具材に使うよか、炒め物にするのかな」

どうやって調理して食べるかまでは、ぼくは知らない。

毒はないらしいのだが。

「……ん？」

と、キノコをながめていたミケが何かに気づいたようだ。

「なあみんな、あれは何だ？」

「えっ、どれどれ？」

「ほら、キノコのカサのところ。何かがキノコをかじったあとみたいなの」

ミケの視線の先には、カサの一部が欠けたキノコが一本。というか、ほかの成長途中の小さな（ぼくの腰くらい）の大きさはあるけど）キノコも、ちよくちよくカサがかじられている。

「一部の生物にとつては、ここはいいエサ場になっているのしょうか」

ぼくはかじられた箇所^{かしよ}を観察してみた。歯型から考えるに、小さいキノコをかじったのは、おそらくチューベル系統のモンスターだ。

けれど、背の高い方に残った歯形に関しては、何の生き物がつけたものなのか、判別できなかった。

ただ、一口でかじった痕跡^{こんせき}と考えると、けっこう大きな口の持ち主だなあ、とは思う。

「クマか何かかなあ」

「なにっ、暴れグマとか、会いたくないぞ」

「暴れグマとの戦闘なんて起きたら、そりゃあクマつちやうわ」

マレアのチープなダジャレはスルーしておくとして、クマでなくとも、ここに食事に来る生き物と鉢合わせてしまうのは困る。

残ったカサの部分の採取はほどほどにして（そこそこめずらしいキノコだし、持ち帰ればいいお値段で売れるはずだ！）、ぼくたちは赤雨大キノコの群生地帯から離れた。

IV

「このキノコいくらで売れるかしら？」

「売っちゃうのか？ 売るより食べてみたいぞ」

「それなら売る分を別にして、私たちが食べる分は残しておきましょうか」

赤雨大キノコをおみやげにしたぼくたちは、また木々の間を進んでいく。

森の入り口から、けっこう来たはずだ。最初の浅い場所よりも、この辺りは明らかに霧が濃い。

だんだん濃度の増していく霧の中を歩いていると、なんだか鼻がムズムズしてきた。

「へっぶしっ！」

ミケもそうだったみたいで、顔をそむけてくしゃみをしている。

ぼくたちは森の開けた場所へとやってきていた。

「ここすごいわね」

グシグシと目をこするマレア。

霧は一層すごいことになっている。体にまとわりつかんとするようないきおいだ。

「……霧の発生源は、あそこようですね」

ゆっくり歩を進めていくと、霧に隠れていた洞窟が、だんだんと姿を現した。

なるほど、この洞窟の奥から流れてくるようにして、霧は立ちこめている。

「もしかして、ダンジョン？」

困ったような口ぶりながらも、マレアの目はうれしうだ。

「おや、足跡がありますよ」

フェレオルが、洞窟の入り口付近の足跡を発見した。

「……………」

じっと足跡を確認していたフェレオルの顔が、きびしくなっていく。

イヤな予感のしたぼくも足跡を注視する。

「これは……クマ？」

「たしかに似てはいますが、クマとは別の生き物がつけたものです」

「だよね。ちよつとクマのそれとはちがう気はするし、

二足で歩いた跡っぽいし」

「じゃあ何のモンスターのものなんだ？」

ミケがフェレオルに尋ねると、彼は一呼吸おいた。

そうして、

「バグベアです」

足跡の主の名を口にした。

「げっ」

ぼくら人間やシェイプアイ、ドラゴニアンのような種族を、まとめて人族と呼ぶ。

一方で、人族に対して敵対的な種族——ゴブリンだのクリッターだのオンメギだの——は、妖魔と呼ばれる連中だ。

バグベアは、妖魔の一種である。容貌はクマに近しいが、クマと比べると体全体に対して顔が大きく、ねじれた角を生やしている。

知能は低い、バグベアの体長は三メートルに達することがあり、見た目通りの高い腕力の持ち主だ。

「……ほかの妖魔の足跡はなさそうですね」

フェレオルの言葉に、ぼくらは胸をなでおろす。敵はバグベア一体ということだろう。

バグベアは、他の妖魔のペット兼用心棒的存在となっているケースがあるのだ。

バグベア一体を退治するのも大変なのに、その上、別の妖魔も同時に相手取るなんて、ぼくらの実力ではムチャもいところだ。

「一体だけなら、なんとかありますね」

すでに、フェレオルの口調はかなりやわらいでいた。

「なんだ、バグベアくらい余裕って感じだな？」

「まちがっても余裕とは言いませんが、勝てはしますよ。我々が四人そろっていれば、ね」

ミケに笑顔を見せるフェレオル。

「……うん、この人がそう言うとお安心感がある。」

「ラーク、松明を貸してください」
フェレオルはこちらに手を伸ばしてきた。ぼくは彼に「ライト」のかかった松明を渡す。

選手交代。ここからはフェレオルが先行、ぼくは後ろだ。

「では、行きますよ」

洞窟へと進入するフェレオルに、用心しながらぼくたちは続いた。

洞窟内には、あいかわらず霧がたちこめていた。それに加え、森の中を歩いていた時とは段違いに重苦しい空気が、ぼくたちの間に流れている。バグベアがいるとわかっていなのだ、当たり前のことである。

入り口の足跡は、何重にもベタベタとついていて、バグベアが、洞窟と外とを行き来している証拠は、悲しいことにバツチり残ってる。

ここがバグベアのすみかである可能性が高いわけだ。

そして、ヤツと遭遇そうぐうするのは、思いのほか早かった。

「止まってください」

ぼくらの前を歩き、洞窟のつきあたりの角から先をのぞいたフェレオルが、短くそう言った。

一同はすぐに足を止める。

「バグベアがいます」

フェレオルが言うには、この先は空間が広くなっているそうだ。その部屋のようになった場所のすみっこで、寝そべったバグベアの姿があったらしい。

「どうやら、こちらには気づいていないようですね」

こりやラッキーだ。

「……不意をつくチャンスね」

ワンドを手にとったマレア。

「どうする？」

「まずは遠距離からしかけよう」

ぼくも弓を取り出して、マレアの真横に立った。

「では、先制攻撃はラークとマレアに任せます。お二人

の攻撃の後、私とミケが間合いを詰めましょう」

「わかった」

フェレオルとミケが、ぼくらのじゃまにならないような位置に移動する。

これで戦闘前の隊列は整った。

「……………」

うう。さすがにバグベア相手だと、ナットチューベルとは比較にならないほどの緊張がある。

ぼくはふと顔を横に向ける。

ちようど同じタイミングで、ワンドを右手で握りしめたマレアも、ぼくの方を見ていたようだ。

両者の目と目が合った。

「……ふふ」

なんだか彼女の瞳を見ていると、肩のおもりが外れた気がする。

それはシェイプアイ特有の瞳の力なのか、はたまたその瞳の持ち主が、気の置けないパーティの一員だからなのか。

「どうしたの、ラーク？」

「なんでもない」

「そう？」

なんて会話をしていたら、マレアのこわばっていた顔つきも、いつの間にか戻っていたみたいだ。

「よし。マレア、準備はいい？」

「うん」

返事を聞いたぼくは、弓に矢をつがえた。同時に、できるだけ抑えるようにして呪文を唱える声が、左の耳から入ってくる。

数秒後。

ぼくの放った矢と、マレアの魔法≡ファイアーショット≡による火炎のつぶてが、無防備なバグベアに飛んでいった！

「グガアッ！」

突然の痛みにバグベアは飛び起きる。そこへ駆け足で近づくと、ミケとフェレオル。

しかしながら、自分に武器を向けてやってくる二人をだまって待つてくれるほど、敵も甘くはない。

猛々しい吠え声^ほを上げたバグベアは、先頭を駆けるフェレオルへと右腕を振り下ろした。

寝起きにしては、あまりに重い一発だ。

強力な妖魔を前にしても、フェレオルは落ち着いていない。バグベアの攻撃を彼は見事に回避。続く左腕の攻撃も、横に跳んで回避してみせた。

両腕を振り下ろしてやや前のめりになったバグベアを、フェレオルの後ろにいたミケは見逃さない。彼女はバグベアの左腕めがけて、バトルアックスをおみまいする。腕にヒットはした。だがしかし、バグベアもただではやられてはくれない。

狙われなかった右手を、ミケの斧の柄に伸ばすバグベア。柄をつかんだバグベアは、そのまま斧を思い切り引っ張った。

つんのめったミケ。

バグベアはお返しとばかりに、太い腕でミケの脇腹^{わきばら}を殴りつけた。

ガアン！

ミケの装備する金属鎧が打ちつけられる音が、洞窟に響きわたった。

一瞬、宙に浮きあがったミケの体。

「ミケ！」

ぼくとマレアが叫んだ^{さけ}。

倒れたミケへ、さらに攻撃をしかけようとするバグベア。それを阻止すべく、マレアの≡ファイアーショット≡が文字通り火をふく。

「ミケ、今行く！」

一方のぼくは弓をしまいながら、ミケに小走りで近づいた。

しかしそこへ、二発目の火炎をみまわれながらも、なおズンズンと向かってきるバグベアの姿。正面から迫る巨体の恐怖たるや。

毛皮の焦げた臭いと共に近づいてくるそれは、野生のクマなんかよりも、よほどおそろしい殺気を放っていた。「ラーク！」

が、ぼくとバグベアの間割って入ってきてくれた者

が一人。

「ミケの回復を！」

フェレオルだ。

「助かる！」

ぼくの声を背中で聞きながら、彼はひるむことなく、

バグベアと至近距離で対峙する。

バグベアは眼前に飛びこんできたフェレオルを、ミケ同様に殴り倒そうとした。

しかしながら回避力に関して言えば、盗賊フェレオルはぼくらの中で断トツトップだ。バグベアの太く鋭い爪を、身軽な彼は次々とかわしていく。ショートソードで敵にダメージを与えることも忘れない。

フェレオルが足止めをしてくれている今、ぼくも自分の役割をこなさねばなるまい。

ぼくは魔力をこめた左手を、傷ついたミケの体にかざした。

レンジャーの中には、大自然の力を借りて魔法を用いるクラス、ドルイドの唱える呪文の一部を操ることができきる者も多い。

かくいうぼくもその一人であり、ミケに対して使った

のは、対象の傷を癒す回復魔法《キュアウーンズ》。

魔法の専門家ではないぼくの力では、回復量もそこまで高くないが、とっさの応急手当としては十分だ。

「サンキュッ」

少しながらも体力の回復したミケが、バトルアックスをギュッと握り直した。

すぐ近くでは、なおもフェレオルとバグベアの攻防が続いている。さしものフェレオルの顔つきも、けわしいものになっていたが、バグベアの爪は、フェレオルの黒い革の胸当てを傷つけるにとどまっている。

自分の攻撃は当たらず、敵の攻撃はさけられず。バグベアはかなりイライラしているみたいだ。

怒りの矛先をフェレオルにギラつかせ、周囲のことなど見えていない様子。ひたすら目の前の人間に攻撃を続けている。

こんな、フェレオルの挑発に乗せられた状態のバグベアでは、三度発射された《ファイアーショット》をよけられるわけがなかった。

マレアの一撃が、こげ茶色の毛皮を焼いた。すかさずぼくとミケも、バグベアの死角から追撃をかける。

「ウアガアアアアア！」

肩を突くブロードソード。

それからのバトルアックスが、痛恨の一打を加えた。

「ガアアッ………！」

腕を振り上げたままの姿勢で、バグベアの動きが止まった。

………

ドサッ

ミケの一刀を最後に、とうとうバグベアは、音を立てて倒れ伏したのだった。

V

妖魔の体内には、妖魔素ようませという邪悪な魔力が取りこまれている。そのおかげで、妖魔は人族を超える身体能力を有しているが、妖魔素の限界まで溜たまった濁にごった肉体は、死んでしまうと形を維持できなくなってしまう。

目の前のバグベアの体も、妖魔の例にもれず黒い煙となって消えていき、灰と体の一部――バグベアの鋭い爪だけが残るばかりとなった。

「……はーっ」

バグベアだった黒い煙が霧に溶け、張りつめていた空気をもとに戻すように、みんなの息がはかれた。

よかった、ぼくたちの勝利だ。

「みんなっ！」

前衛にいたぼくらに駆け寄るマレア。

「やー、勝った勝った」

ミケはバトルアックスを下ろし、額ひたいをぬぐった。

「フェレオルの言った通りだったな」

パーティの力を合わせて危機をくぐり抜けたときは、やっぱりうれしくなる。

好きなんだなあ、みんなのことが。

「おっと、そうだ」

ぼくは前線でバグベアとやりあったミケに向き直った。

「ミケ、回復をしなきゃ」

達成感に浸るの^{ひた}は後にして、ぼくはもう一回《キュア
ウーンス》を使った。

優しい緑色の光が、ぼくの右手に宿る。

「ありがとな、ラーク。もう大丈夫だ」

《キュアウーンス》で回復したミケが、軽くジャンプ。
あんな重い攻撃を喰らっても、二回の《キュアウーンス》
で大丈夫と言えるのは、さすが戦士の耐久力と、ドラゴ
ニアンの生命力である。

戦いを終えたぼくたちは、改めて部屋を調べ始めた。

「……どうやら、もともと洞窟には、バグベア以外にも
何かに住んでいたようですね」

サビの浮きでたツルハシや粗末な武器、大きな爪のよ
うなもので破られた、ポロボロの衣服。

部屋のすみに転がっているそれらの数から考えるに、
およそ五、六人くらいの何かがいたようだ。

「ゴブリンとかかしら？」

「サイズ的には、小型の妖魔のものだろうな」

服が落ちてい^るということ^は、ここが洞窟の住人の墓
場となったのだろう。その住人が妖魔なら、服だけ残っ
て死体がないのも納得だ。

「仲間割れでもしたのかしら？」

「外の動物と同じように凶暴化したバグベアに襲われて、
全員やられちゃったのかな」

過去にこの洞窟でどんなことが起きたのか、はっきり
とはわからない。とりあえず、やはりバグベア以外の妖
魔がいなさそうだと^いうことだけは、なんとなくわかっ
た。

部屋の奥の方には、通路があった。

盗賊のフェレオルが先頭に立ち、ぼくたちは部屋を抜
け、先に進む。

「すっかり忘れていたけど、霧の原因がいまだにわかっ
てないのよね」

「きつと、この先に答えがあるでしょう」

果たして、フェレオルの言葉は現実となった。
霧の洞窟をしばらく歩いていった先に、また広くなっ
た空間。

「うひいっ」

その場所をのぞいたマレアが思わず声を上げ、後ずさ
った。

天井の一部がくずれ、太陽の光が差しこんでいる部屋
のカベに、気持ち悪いほどの量のコケが、びっしりと生
えていたのだ。

鳥肌を立てたマレアがコケから顔をそむける。

「数年おそうじをサボったお風呂場みたい……」

反対に、ぐるりと部屋をまんべんなく見渡したのはフエレオル。

「……」

彼は手近なコケをむしり、仔細しさいにながめる。

「……そういうことですか。これが事件の元凶ですね」

「このコケが？ 事件の元凶？」

「はい」

ミケの問いに答え、フエレオルはコケを部屋に放り投げた。

「このコケですが、名前をダリマンゴケと言います」

フエレオルいわく、ダリマンゴケとは、すでに他の植物が根づいている土地に侵入するような力はないが、繁殖能力はやたらと高いコケらしい。

「天井が崩れて、あるていどの日当たりが確保できるようになったこの空間は、ダリマンゴケにとつて良い環境だったでしょう。ある日、天井が崩れた後、もともとここに生息していたコケが、一気に増殖したのだと思います」

陽の差す天井を見上げたフエレオル。

なるほど。ダリマンゴケはじまんの繁殖能力を発揮して、ライバルのいないこの空間で、こんなバカみたいに増えたわけだ。

「ダリマンゴケは春になると、とてつもない量の胞子を

ばらまきます。他種との土地の奪い合いには弱いので、大半は発芽せず死滅してしまいましたが、胞子は空気中を漂ただよいながら、かなり遠くまで運ばれていくのです」

ここまでの解説を聞いて、なんとなく、フエレオルの言いたいことがわかった。

「ぼくらが今まで霧だと思っていたのって、ここで育ったコケの胞子だったってこと？」

「とということですよ。こんな相当な数のダリマンゴケがいっぺんに胞子をまき散らしたわけですから、その量も

尋常じんじょうではなかったのだと思います」

霧みぎと見紛うほどの胞子を放出するとは、おそろしいヤツだ。

「霧が出た原因はわかったけどさ」
マレアが口を開いた。

「なら、動物が凶暴になったのは何でなの？ このコケと関係はあるのかしら」

「おそらく、コケの胞子を吸いすぎたせいでしょう。ダリマンゴケは、中毒性の高いお薬……つまり、違法薬物の材料になるコケなんです」

フエレオルの言葉にマレアとミケは青ざめ、あわてて両手で口をふさいだ。

ぼくも急激に気分が悪くなってきたぞ。

「安心してください。薬の材料にするのは、主に茎くきや葉の部分ですから。孢子であれば、かなり多量に摂取しない限り、効果はありません」

「……アタシたち、四、五時間くらい霧……孢子の中を歩いた気がするんだが」

「そのていどじゃあ、まだまだです。そうですね……丸二日くらいは霧の中にとどまらないと、意味はないと思いますよ」

「よかったあー！」

心底安心したような口調で、マレアが言った。

「バグベアやつつけたときよりもホツとしたわ」

ぼくも同じ気持ちである。気づかないうちにドラッグ中毒になるところだった。

「逆に言うと、二、三日以上ここにいと危ないでしょうね。幻覚を見たり、精神状態が不安定になってきたりといった症状が表れてくると思われます」

「……ということは、森の動物たちがおかしくなったのは……」

「お薬ガンギマリになっちゃったせい？」

「マレア、言い方」

だが、おおむね彼女の言葉通りだろう。森に暮らしていた動物たちは孢子の影響で中毒になってしまい、凶暴

化してしまったのだ。

「じゃあ、このコケどもをどうにかすればいいわけだ」

ミケがぐるっと部屋を一瞥いちべつした。

「燃やしちゃう？」

マレアがワンドを取り出す。

「それがいいです。後腐れなくやってしまいましょう」というわけで、ぼくたちはダリマンゴケの部屋に油をまいた。

「マレア」

「はい。それじゃあ、いくわよっ」

全員が部屋から離れ、マレアは《ファイアーショット》で油のかかったコケに点火。特別サービスで、入念に三回も魔法を飛ばした。

「更地さらちになれば別の植物がやってきて、ダリマンゴケの増えすぎを抑制してくれると思えますよ」

もうもうと燃え上がるダリマンゴケを背に、ぼくたちは洞窟を後にした。

予想以上の大仕事だった依頼を終えたぼくたちは（報酬が上乘せされたので、そこは満足だ）、ロロメータへと

帰っていった。もちろん、カムオ村で夕飯のカラアゲダ
ンゴの塩ゆでをたらふく食べ、一晩ぐっすり眠ってから
だ。

「さあ、こいつはどんな味がするかな？」

森で取ってきた赤雨大キノコは、帰り道のお昼ご飯の
おかずに使うことにした。

料理を担当するのは、曲がりなりにも大キノコの知識
を持っていたぼく。と言ったって、赤雨大キノコをこれ
まで調理したどころか、食べたことすらないので勝手が
わからない。

「わからないなら、無難ぶなんに仕上げよっか」

ぼくは主役のキノコとベーコンを一口大に切り、フラ
イパンにオリーブ油をひいた。フライパンに輪切りにし
たトウガラシを放りこみ、キノコとベーコンを軽く炒め、
パッと酒、塩で味つけ。

……そんなに期待しないでほしい。ぼくはコックでは
ないのだ。

「お昼ご飯できたよー」

木でできた大皿に盛りつけたのは、赤雨大キノコのピ
リ辛炒め。

「こうしてお皿に乗っかっていると、まあ食べ物に見えな
くはないわね」

ゆかいな色彩をしたキノコをながめて、マレアが言っ

た。

案外、香りはいい。外見に反してわりとキノコっぽい、
すなおな匂いが鼻をくすぐる。

問題は味だ。さてどうだろう。

ぼくたちは、行きのお昼休憩と同じようにそろって座
り、キノコをほおばって……

「……なんというか、その」

「ごく平凡へいぼんな味、ですね」

「だな」

「可もなく不可もなく？」

特別おいしいとは思わないが、かといってマズくもな
い。リアクションに困る味であった。

微妙な面持ちになってしまったぼくたちは、お互いに
顔を見合わせる。

「……ははは」

ミケが笑った。

「わっはっはっは！」

大きなドラゴニアンの大きな声につられ、マレアとぼ
くも笑い声を上げた。声こそ出していないフェレオルも、
楽しそうに目を細める。

ロロメータに戻ったら、舌になじんだへはるかぜ亭
の定食を食べよう。ぼくたちはそう決めたのだった。